きずな

いのち。つながるマガジン Vol.6
2015.1

長野県信濃町、称名寺にいまも残る石の鐘

梵鐘さえも供出しなければならなかった

あの時代に、もう戻りたくはない

子どもたちの未来のために いま私たちがすべきこと

二〇一三（平成二十五）年一〇月一日の人口推計で、戦後生まれの人口が一億人を超えた。総人口に占める割合では、実に七九、五％が「戦争を知らない世代」ということになる。日本がこのような人口分布になっている中、今年七月一日、安倍内閣は他国への攻撃に自衛隊が反撃する集団的自衛権の行使を認めるために、憲法解釈を変える閣議決定をした。先の戦争での多くの犠牲と反省の上に立ち、平和国家としての歩みを続けてきた日本が、直接攻撃されていなくても他国の戦争に加わることができる国に大きく転換したのだ。また、憲法の理念に関わる重大な解釈変更が閣議でなされたという事実は、立憲主義に反するだけでなく、日本国憲法の存在意義を大きく貶める暴挙だといっていいだろう。

しかし、驚いたことに、この閣議決定に対して国民は比較的寛容だった。この件に関する世論調査は、設問の内容や集計の方法に各メディアの思惑が大いに反映されているようで、結果に幅がありすぎるため正確な数字は示せないが、おおむね三割以上の国民が集団的自衛権の行使容認について賛成だと答えているのだ。平和憲法の根本的な部分を揺るがし、日本が〝戦争をしない国〟から〝戦争に備える国〟になってしまっているのにもかかわらず―

「戦争を知らない世代」が人口のおよそ八〇％を占める現在、戦争のリアリティは失われつつあるといえよう。特に両親がともに戦後生まれの若い世代においては、戦争が日本の歴史の一コマとして客観視される傾向もあるようだ。歴史に過ぎないのだから、失われた多くのいのちは、戦争という事象を示すひとつの要素でしかなく、一括りに数値化されて捉えられてしまう。私たちは、いのちの問題を取り扱うべき念仏者として、この傾向に危機感を覚えずにはいられないはずだ。

詳しくは後述するが、私たちの宗門には、戦争に対して積極的に協力してきた暗い過去がある。親鸞聖人が「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」とお示しになっている通り、状況に応じてはどんなことでもしかねないのが私たちの本質だろう。まずはそういう我が身であることを自覚した上で、戦争の事実・宗門の過去を直視していきたい。慚愧のうちに「非戦平和」への思いを新たにするために。

（行事広報専門部会　寺尾　拓路）

第34回千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要ー長野教区団体参拝ー

第16回平和を願うつどいー世代を超えて語り継ぐ千鳥ヶ淵法要の願いー

浄土真宗本願寺派として、悲惨な戦争を再び繰り返してはならないという平和への決意を確認するため、毎年9月18日に、東京・国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑において修行されている全戦没者追悼法要。長野教区では、第１回の法要から団体参拝を実施している。また、それに併せて各種研修会を行い、参加者がともに非戦平和の願いを共有する機会となっている。ここでは、道中のバス車内で行われた研修、高岡教区主催で行われた「第16回平和を願うつどい」の概要をご紹介する。

本願寺教団の戦争協力とは？

仏法を真諦、王法を俗諦とする真俗二諦論(*1)を基軸に、門徒は全体主義的国家体制に従うべきとする戦時教学が確立され、これによって、教団を挙げて戦争に協力できる理論的な基盤が作り出されていった。その中で、金属仏具・梵鐘を国家に献納するようにとの教団からの指示もあった。国家権力と教団との関係を考慮したとしても、これは決して忘れてはならない事実だ。

なぜ千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要なのか？

国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑には、主に「アジア・太平洋戦争」で亡くなられた軍人から民間人にいたるまでの、ご遺族のもとに帰ることのできなかった約35万の方々のご遺骨が納められている。その経緯からも、この墓苑は、国籍・思想・信条を超えて全ての戦没者を追悼するにふさわしい場所といえる。満州事変の発端である「柳条湖事件」が起こった9月18日にこの墓苑で法要を行うことで、非戦平和を求める念仏者の決意を強めていく機縁となる。

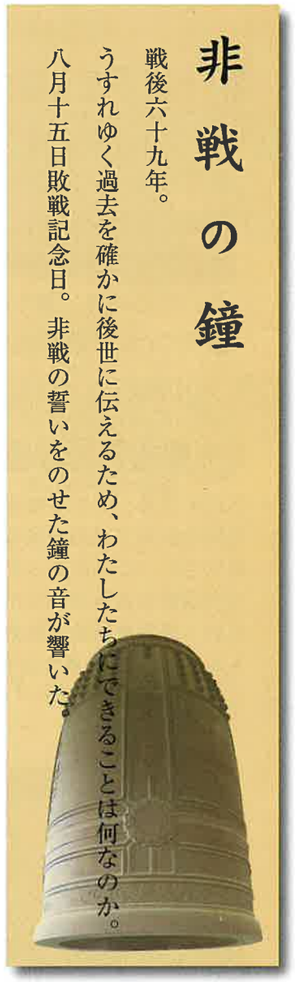
戦争に対する念仏者のありかたとは？

浄土真宗の根本聖典である「大無量寿経」には、法蔵菩薩の第1願として「設我得仏 国有地獄 餓鬼畜生者 不取正覚(*2)」と掲げられている。その願いに応えた世界が浄土であるならば、私たちは念仏者として、地獄（戦争・暴力）・餓鬼（差別・経済格差）・畜生（抑圧・支配）のない国づくり、生き方を目指すべきであろう。

＊1　真俗二諦…諦とは真実・真理のこと。真諦とは出世間的な絶対的真理をさし、俗諦とは世間的・世俗的な真理をさす。
　　戦時教学では、当時の国家体制・法律を俗諦として尊重してきた。
＊2「設我得仏 国有地獄 餓鬼畜生者 不取正覚」…「たとひわれ仏を得たらんに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」

非戦の鐘

戦後六十九年。
うすれゆく過去を確かに後世に伝えるため、わたしたちにできることは何なのか。
八月十五日敗戦記念日。非戦の誓いをのせた鐘の音が響いた。



■長野教区河西組の取り組み

長野市内の浄土真宗本願寺派二十一ヶ寺からなる河西組は、敗戦記念日に鐘をついている。九年前にスタートし「非戦の鐘」と名付けられた。「戦争は嫌だ」という想いを持つ人ならば、宗教や思想信条に関係なく誰でも撞くことができる。

「非戦の鐘」は、パフォーマンスとしての取り組みではない。戦時中、戦争に協力した教団の姿勢を反省し、改憲論議の進む最近の情勢に「警鐘」を鳴らそうという取り組みだ。

明治政府は「富国強兵」を国策の基本とし、日本は軍事主義国家へ突き進んだ。教団は、兵器の一部にするために梵鐘や金具類を国に差し出し、戦死者の顕彰やお説教で戦意高揚に加担した。兵士となり戦地へ行った僧侶もいた。命の尊さを伝える立場の教団が、時代や社会に流されて、命を軽視する戦争を批判する勇気を持てなかった。

仏教では「兵戈無用（ひょうがむよう）」（兵隊や武器は必要ない）という時代や社会を越えた普遍の真理を説いている。教団は「仏法に背く」という痛恨の歴史を背負うこととなった。

「これらの事実から目を背けず、強い反省のもと、尊い命と人権を見直し、それらを脅かし壊そうとする戦争を批判する勇気を持とう」、という強い誓いのもと「非戦の鐘」は始まった。

■非戦の鐘を訪れた人々の声

非戦の鐘には、毎年多くの人が訪れている。今回取材をしたときも、雨の中大勢の人が集まっていた。訪れた方の中には「十五メートルほど先に爆弾が落ちてきた」、「武器を作る労働は過酷で友人をたくさん失った」と生々しい経験を口にする人もいた。また、「子や孫の代まで平和が続いてほしい」、「とても怖いから戦争はいやだ」と戦争を否定し平和を願う声がきこえた。「集団的自衛権の行使が閣議決定され、この先、日本はどうなってしまうのか」と、不安な気持ちを抱いている方も多く見られた。

多くの人が訪れた非戦の鐘

三世代で参加してくれた方も

■私たちにできることは何か

第二次世界大戦後、憲法九条の制定により日本は「戦争ができない国」となった。そして、これまで「戦争ができない国」にどうにかとどまってきたと判断していいだろう。しかし、ここ最近、集団的自衛権の閣議決定や、特定秘密保護法の施行により「戦争ができない国」から「戦争をしようと思えばできる国」に変わりつつあるように思う。戦争はもはや他人事ではなく、自分の身にふりかかってくる可能性がでてきた。

本当に戦争が起きたらどうなるのか？生活は、家族は、友人は、大切な人たちはどうなってしまうのか。

平和な生活はあたりまえのことではなく、戦争での多くの犠牲の上に成り立っている奇跡だ。そのことを忘れてしまい、世論に流されるという過ちを繰り返したら、奇跡はすぐに崩壊し、再び戦争が起きてしまうだろう。

私たちに今できることは、過去の歴史を謙虚に学び、二度と同じ過ちを繰り返さないことだ。そして、時代社会に流されず、「戦争は嫌だ」という想いをしっかりと表現していくことだと思う。

河西組から始まった「非戦の鐘」は、多くの寺院や門信徒により、どんどん広がりをみせている。戦争への反省と平和への願い「戦争は起こさせない」という一人一人の強い誓いを乗せた鐘の音が、いつまでも平和な空に響き渡ることを心から願う。

（行事広報専門部会　朝比奈　利奈）

非戦の鐘のスタッフのみなさん

■長野教区松本組西生寺の非戦の鐘

二〇一四（平成二十六）年七月一日、国会において集団的自衛権の行使を認める閣議決定が行われた。その一カ月半後の八月十五日正午、小雨の中で今年も西生寺の梵鐘が鳴った。

今年で八回目となる西生寺の非戦の鐘は、「戦争は〝イヤダ〟」というあなたの気持ちを鐘の音色に表現してみませんか」という呼びかけの下、住職、副住職であった海野忍彰さん、また地域の老人クラブ「栗の実会」の会員の方々が中心となって始まった。

毎年、鐘をついた後、戦争で亡くなった方々のお墓に線香を供えて手を合わせ、その後に本堂でお勤めをしている。

参加者のおひとりに話を伺うと、「戦争は二度と起こってはならない。世代が変わっても時代が変わっても、戦争だけはしてほしくない」と柔らかい口調ながらも、確固たる想いを語ってくださった。

一人一人想いをもって鐘をつく

今年二十七歳の私―　戦争については、中学高校の教科書の数ページでしか学ばなかったと振り返る。十年前に亡くなった祖父も戦争体験者であったが、戦争の話を聞くことはなかった。

今回、非戦の鐘を取材して、改めて戦争の愚かさを知ることができた。戦争の愚かさ、過去の過ちを知ることで、「兵戈無用」**兵隊・武器は必要ない**、「怨親平等」**誰しもが対等に付き合える社会**、というお釈迦様が説かれた言葉を自身の中で今一度、深く味わうばかりだった。

「知ること」が過ちを繰り返さないための大切な一歩であると考える。

（行事広報専門部会　柳川大喜）

西生寺本堂での念仏講の模様

『戦中戦后を顧みて』

地元老人クラブ「栗の実会」の方々によって制作されたこの冊子には、会員の方々の戦争体験が綴られている。

戦争が当時の人々をどれだけ苦しめたのか、また、二度と起こってはならないという強い想いが詰まった貴重な資料である。

座談会

非戦平和の活動を通して見えてきたこと

－2014（平成26）年11月28日　本願寺長野別院において－

麻山　本日はお集まりいただきありがとうございます。今回のきずなは、「いのちの問題としての非戦平和」をテーマとしました。戦後六十九年が経過し、〝戦争を知らない世代〟が人口の八割に上ったそうです。さて、そんな中で、現政権は今年七月、集団的自衛権の行使を容認する閣議決定をしました。私たちの平和・いのちが脅かされつつあるいま、念仏者として何を伝え、どう行動すべきなのでしょうか。本日は「非戦平和の活動を通して見えてきたこと」と題して、座談会を開催させていただきます。ご参集の皆さんには、教区内外の活動に参加される中で、またそれぞれの生活の中で、戦争や平和について様々な思いや願いをお持ちになっていることでしょう。まずは、皆さんが戦争や平和について考えるようになった契機について伺います。

常盤井　祖父が昭和十九年、金沢連隊に召集されたことを、子どものときに祖母から聞かされました。戦争とは、いわば〝殺し合い・奪い合い〟の場です。そのような場に僧侶として行かなければならなった歴史。それだけは決して繰り返してならないと考えたとき、非戦平和こそが大事なんだと気づかされました。

大石　私は、今日の参加者でただ一人の戦中派だと思います。私が生まれた年の十二月にパールハーバーで開戦になりました。記憶があるのは終戦の年あたりからですが、長野飛行場が近くにあり、練習機が頻繁に飛び交っていました。赤い色の翼だったのを覚えているトンボと呼んでいたのを覚えています。長野空襲の際、飛行場を爆撃する前に、私の家の手前から掃射を始めていました。弾が飛び出すのが見えたほどです。そのときは子どもだったので、戦争の怖さの実感はありませんでしたが、中学生ぐらいになって、映画を通して広島・長崎の惨状を知り、戦争なんてしてはいけないと思うようになったんです。

金井　父がニューギニアからの帰還兵で、マラリア後遺症に苦しむ姿を見ており、小さいときから戦争の名残は身近にありましたが、少し違った方向から話をさせてもらうと、私にとって最初の戦争は受験戦争でした。子どもの多い時代だったので、大変な競争率でした。誰かを蹴落とさなければ勝てない。ということは、必ず敗者が生まれるわけです。人と争うことの意味、戦争の本質を感じた場面でした。

寺尾　私は両親がともに戦後の生まれで、まさに〝戦争を知らない世代〟です。戦争について深く考えるようになったのは学生のころで、当時、〝新しい歴史教科書をつくる会〟というのが話題になりました。日本を不当に悪く書く自虐史観を改めていこうとする運動で、植民地主義が大きな流れだったあの時代に、資源を持たない日本が西洋列強と同じような政策をとるのはやむを得なかったというような考え方です。実は、私もその論理に同調している時期がありました。しかし、のちに得度をして親鸞さんの教えに触れたこともあって、それは独りよがりな戦争観だったなと痛感しました。やむを得なかったでは済まされない、侵略された側の視点が欠如していたわけです。戦争と平和を考えるにあたって、大きな転換点となりました。

麻山　七十代から三十代まで、さまざまな年代の方々の戦争との関わりをお聞かせいただきました。

座　長
麻山　智晃（行事広報専門部会長・河東組　明徳寺住職）

参加者
大石　武男（河西組　専福寺門徒推進員）
金井　達也（山地組　明専寺門徒推進員）
常盤井智行（飯山組　明徳寺住職）
寺尾　拓路（行事広報専門部員・川中島組　西法寺衆徒）

今年の千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要に私も参加し、車中や第五福竜丸の展示館での研修を受けさせてもらいました。自坊に帰ってご門徒さんに「やっぱり戦争はしちゃダメですよね」と話をしたとき、戦地に行かれた九十二歳の方が「人殺しといわれるかもしれないが、あのときはそうするしかなかったんだ。それが戦争なんだ」とおっしゃいました。後に見聞きするだけで実体験のない私は、戦争や平和という言葉を軽く考えていなかったかと反省をさせられた次第ですけれども、浄土真宗の教え、お念仏の教えをいただく私たちはその言葉の持つ重みをどのように伝えていったらいいのでしょうか。

常盤井　我々本願寺教団は、かつて戦時教学を構築し、戦争に協力してきました。主導してきたともいえます。差別についても、社会が差別社会ならそれをそのまま肯定し、教団内に差別制度をつくりました。穢寺・穢僧・差別法名などはその象徴です。この背景には、死後の浄土往生は阿弥陀仏にまかせ、この世は世俗の論理に従うという〝真俗二諦〟の考え方があります。当時、いや今もそれが親鸞さんの教えとされているように思えてなりません。梵鐘を武器にと供出したこと、戦死者のみを英霊としてきたことを反省し、終戦の日に非戦の鐘を撞く意味、千鳥ヶ淵の法要が〝全戦没者〟の追悼である意味を常に確認していく必要があるといえます。

金井　次の世代、いまの子どもたちに戦争の現実感をどのように持たせるか。ゲームの世界では、負けたらリセットすればいい。しかし、実際の戦争ではいのちを失ってしまうんです。戦争を教えるとは、いのちの大切さを教えていくことではないでしょうか。私は七人家族で、孫が三人います。今年の夏、四十匹くらいのカブトムシをとってきました。虫かごの中で死んだカブトムシを一緒に畑に埋めて手を合わせ、「これがまた土に還って肥料となるんだよ」と話しました。小さいうちからいのちを身近に感じさせることが、子どもの将来のためには大事なのだろうと思っています。

大石　子どもの時分、所属寺の報恩講のお説教で、蜘蛛の糸の話を聞いたことがありました。「人に害を与えようとすれば必ず自分に跳ね返ってくる。争いごとはしないほうがいい」とお話しされていた記憶があります。だから、私は学校で殴り合いの喧嘩は絶対にしなかった。おみのりによって行動する原点だったかもしれません。政治問題や社会問題を考えるとき、必ずおみのりに聞いて対応するように私はしています。非戦平和についていえば、大無量寿経に説かれている〝兵戈無用〟（＊1）。この教えを掲げて、これからも行動していきたいです。

寺尾　親鸞さんが「一切の有情はみなもって世々生々の父母兄弟なり」と示されています。自分も相手もみな同じいのちを生きる存在だという捉え方は、非戦や差別の問題を考える上で重要かもしれません。やはり、常に自分を中心に置いている限り、御同朋の社会・平和な社会は実現しないでしょう。私自身が実践できていないのですが、相手側の視点を尊重できるように努めていきたいし、そう伝えていきたいと思います。

常盤井　私たちが政治的・社会的な取り組みをなぜするのか。その根拠を周知していくことも求められています。お寺が政治的な発言をするのは控えた方がいいといわれます。お念仏が死後のためのものだという誤解があるからでしょう。〝摂取不捨〟（＊2）の浄土に向かう私たちなのだから、自分さえよければそれでいいはずがない。お念仏の教えをいただいているからこそ、いまの社会やいまの自分に対する批判が生まれてくるのだということを、私たち一人一人が改めて確認しなくてはいけないんじゃないでしょうか。

麻山　私たちがどういった活動をしていくのかは非常に大事なことですが、一方でともにお念仏申す御同行に、会話を通して、活動を通してお伝えしていくことも必要なのだと感じました。本日はありがたいお話を伺うことができました。これを機に、私たちの非戦平和の思いがますます広がっていくことを念願して座談会を閉じます。ありがとうございました。

＊1　兵戈無用…仏法が広く伝わるところでは、兵隊も武器も用いる必要が無いということ

＊2　摂取不捨…阿弥陀如来の光明は十方を照らし、一切の衆生を救い収めて決して捨てないということ

きずな Vol.6 2015 1

活動の記録

2014年 長野教区の復興支援活動

長野教区では東日本大震災から約4年間、24回にわたって東北へ赴き、復興支援活動を続けてきた。

震災から4年たった今も積極的に参加する方が多く、2014年に初めて参加した方も多い。

長野教区では、より多くの被災地で関わりを深めるため、これからも継続的に支援活動を続けていく。

1月 活動

ふれあい交流会／温かい信州蕎麦・ポップコーン・綿あめ・りんご配布
合計 約400食（3日間）
お楽しみ抽選会くじ引き・ゲーム大会
（信濃むつみ高校生）

26日（日）夕方／東松島市　小野市民センター　40名『50食』（新規）
27日（月）お昼／東松島市　根古地区センター仮設住宅集会所　65名『70食』（新規）
夕方／東松島市　ひびき工業団地仮設住宅集会所　130名『150食』（新規）
28日（火）お昼／名取市上余田公会堂　25名『35食』（新規）

3月 活動

ふれあい交流会／温かい信州蕎麦・ポップコーン・綿あめ・りんご配布・手作り信州味噌実演（山椒風味）・お楽しみ抽選会合計 約750食（3日間）

9日（日）午後／閖上さいかい市場　400名『510食』（2度目）
10日（月）お昼／川内借上げ公営住宅（川内公務員住宅）50名『100食』
夕方／宮城野区 岡田西町公園仮設住宅 40名『70食』（新規）
11日（火）お昼／荒浜民間借上げ住宅の会 若松会 40名『70食』（3度目）
夕方／3.11旧閖上中学校　追悼式参加／閖上メイプル館研修

5月 活動

ふれあい交流会／温かい信州蕎麦・ポップコーン・綿あめ・りんごジュース配布・輪投げゲーム大会・お楽しみ抽選会
（信濃むつみ高校生）
合計 約700食（3日間）

25日（日）夕方／名取市愛島宿舎『雇用促進住宅』70名「120食」（7度目）
26日（月）お昼／名取市『美田園第二仮設住宅』120戸「120食」（6度目）
夕方／岩沼市『里の杜西応急仮設住宅』350戸「260食」（2度目）
27日（月）お昼／民間借上げ住宅集会場『上余田公会堂』約50名「100食」（2度目）
夕方／仙台市北六番丁『復興公営住宅』集会所『80食』（新規会場）

7月 活動

ふれあい交流会／温かい信州蕎麦・ポップコーン・夏季限定かき氷・輪投げ・ゲーム大会・お楽しみ抽選会（信濃むつみ高校生）
合計 約660食（3日間）

27日（日）夕方／仙台市復興公営住宅『田子西市営住宅集会場』約150名「220食」（新規）
28日（月）お昼／仙台市『卸町5丁目公園仮設住宅 集会所』約35名『70食』（4度目）
夕方／仙台市『川内借上げ公営住宅 集会所』約35名『70食』（4度目）
29日（火）お昼／名取市民間借上げ住宅集会場『館腰サロン』約50名『220食』（新規）
夕方／仙台市『岡田西町公園仮設住宅 集会所』約40名『80食』（2度目）

10月 活動

ふれあい交流会／温かい信州蕎麦・ポップコーン・輪投げ・ゲーム大会・お楽しみ抽選会
合計 約500食（3日間）
協賛活動／音楽療法（京都の会）

5日（日）夕方／民間借上げ住宅の会『若松会』約50名「150食」（4度目）
6日（月）台風の為活動中止
7日（火）お昼／名取市『美田園わかば幼稚園』約100名「200食」（新規）
夕方／名取市『箱塚屋敷仮設住宅集会所』約160名「150食」（4度目）
8日（水）午前中　石巻市・称法寺　墓地清掃／環境整備活動

長野教区では、今後も災害復興ボランティアを継続していきます。現地ボランティアにご参加いただける方、支援物資を提供していただける方は下記までお問い合わせください。

「御同朋の社会をめざす運動」長野教区委員会 TEL.026-234-1796（長野教区教務所内）

※この活動は、皆さまにご賛同いただいた「たすけあい募金」をもとに進めてまいりました。引き続きのご協力をよろしくお願いいたします。

長野教区実践運動機関誌　きずな　2015年1月1日　●発行　浄土真宗本願寺派 長野教区　〒380-0845 長野市西後町1653　TEL.026-234-1796　Eメール nagano-b@io.ocn.ne.jp　●印刷　株式会社日商印刷